

## 選評

大澤 信

高麗時代被帽地蔵菩薩像に関する一考察

—対馬伝来・九州国立博物館像の制作年代を中心に—

大澤信氏の論文は長崎県対馬に伝来し、現在は九州国立博物館が所蔵する金銅地蔵菩薩像に詳細な検討を加え、高麗彫刻史上の意義を考察している。その最大の成果は、本像が通説より三～四〇〇年遡る高麗前期、十世紀末から十一世紀後半頃に制作されたという新たな年代観を示した点に存する。

本像は従来、高麗後期から朝鮮初期（十四～五世紀）の作とする見解を、日韓両国の研究者が採用してきた。これに対し本論文は面相・体軀の造形、胸飾、膝の衣文、台座全体の形状、台座反花という五つの要素に焦点をあてて他作例と比較し、そのすべてにおいて本像の造形が十四～五世紀の作例ではなく、統一新羅の伝統様式を受け継いだ高麗前期～中期にかかる作例と共通することを、鮮やかに浮かび上がらせた。実物の丁寧な調査に基づく考証はきわめて説得力に富み、随所に観察眼の非凡さがうかがえる。

先行研究では本像の造形に「形式化」のあとが認められること、朝鮮前期・十五世紀の作とされる高敞・禪雲寺地蔵菩薩像との間に形式的な共通点が多く認められること、などが制作年代を下げる根拠とされてきたが、本論文は客観的な事実を積み重ねてこれらの先入観を取り払い、本像の真価を見いだすことに成功している。作品論の定型に則りつつも、高麗彫刻の様式観や編年の根幹に関わる議論が展開されており、禪雲寺像との形式の共通が制作年代の近接ではなく図像の継承に由来する可能性など、今後の研究に有力な指針を与える視点も多数示されている。

地蔵菩薩の図像・信仰の歴史の研究にも、寄与するところが大きい。朝鮮半島の被帽地蔵は従来いずれも高麗後期の作とされ、依拠した図像は十三世紀後半以降、元の侵入に伴って来朝した吐蕃僧がもたらした中央アジアの図像とみなされてきた。論文の冒頭にも記されるとおり、この図像は中国では十世紀（五代～北宋）に敦煌、四川、長江流域などで流行したがその後ほとんど制作されず、半島における受容と年代的に大きな開きがあることが問題となっていた。しかし本像の年代が高麗前期に引き上げられ、半島における現存最古の被帽地蔵と位置づけられた結果、この図像の高麗への波及は、中国における盛行の延長上に生じた現象として、無理なく説明できることとなった。

また両手に宝珠を執る図像について、この像容を説く『地蔵十輪経』が統一新羅時代に半島に伝来していた可能性を入唐僧神昉の事績などによって示し、それを裏付ける統一新羅の作例として榮州・浮石寺の石像を紹介したことも、重要な新知見と評価できる。ただし中国における現存作例の地域分布に偏りがある点も考慮すれば、両手の宝珠と頭巾を併せ持つ図像が半島で成立したと断定するには、なお検証を重ねる必要があるだろう。両形式の結合を説明する際の「古典と新図像の融合」という図式も再考の余地があり、作品・信仰の両面にわたる考察を通して、深層から要因が解明されることを願う。とはいえこれらはあくまで望蜀の言であり、本論文の価値を減ずるものではない。より体系的な研究の完成に向け、発展途上の段階にあることを示すと理解し、今後の研鑽に期待したい。

本論文の充実した内容は日韓両国の学界を裨益し、高麗仏教美術史に新たな展望を切り開くであろう。この分野におけるわが国の研究水準を示す論考として、大いに推賞できる。

以上の理由から大澤信氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称える。